

『律法学者を非難する』

聖書 マタイによる福音書 23章 1～12節

讃美歌 520 521

説教 森田幸男牧師

ただ今マタイによる福音書 23章の 1～12節をお読みいたしました。この 23章全体は律法学者やファリサイ派の人々への厳しい非難に満ちております。それはひと言で言えば、彼らの偽善に対する非難であります。

今日はこの 23章を 12節までしか読みませんでしたけれども、その先を読んでいきますと、「あなたたち偽善者は不幸だ」という言葉が 13節を初めとして 6回も繰り返されております。この「不幸だ」というのは以前の口語訳では「わざわざいだ」となっていました。この「偽善者」という言葉は、時にはクリスチャンに対して言われる言葉であります。以前創価学会の人たちがクリスチャンのことを批判する時に「あなたがたは偽善者だ」とよく言ったものであります。それは“言うけれども言っているようには行っていない”ということです。「偽善者」という言葉の本来の意味は「役者」を指します。役者は、役ですからいろんな役を演じるわけですが、いかに善人ぶってもそれは役を演じているのに過ぎないのであって、役者本人がそれを行っているのではありません。そういうことを「偽善」と言い、そういう人のことを「偽善者」と言うのであります。心から神様を信じ、神様を畏れ、神様に感謝して仕えているのではない。それは見せかけに過ぎない。これがイエス様の律法学者やファリサイ派の人々に対する非難の中心であります。

この 23章の 2節から 4節にこうあります。「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで、実行しないからである。彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない。」こういうふうにイエス様は言われます。

ここに「律法学者たちやファリサイ派の人々はモーセの座に着いている」とあります。この「モーセの座」というのは、大方の方はご承知と思いますが、旧約聖書全体のことを「律法」とも言うのですが、それは神様がモーセという指導者

を通してイスラエルの人々に与えた神の教えであります。「律法」と言うと何か堅苦しい感じがします。堅苦しいということもあるのですが、わたしはしばしばこれを神の「お指図」と言います。しかもそれは本当に神の善意から出た的確な、適切な、そしてわたしという人間を知りぬいた上で歩むべき道を指し示してくださる。それが「律法・トーラー」と言われているものでありますから、これは本来は堅苦しいということではないのです。神様の教え・律法・指図がモーセを通して与えられたわけでありまして。その中で有名なのは、いわゆる十戒、十の戒めと言われるものが一番基本になるわけです。聖書はこんなに分厚いのですが、その根本精神と言われるものが、どういうふう生きる事が本当に神の指図に従うことになるのかを、いろんな具体例を挙げて書いているのが聖書だと言ってよいと思います。「モーセの座」というのはそのようなことで、モーセの後継者として人々に律法を教える立場に就くということでありまして。それがイエス様当時の律法学者でありました。今日ならば、「牧師」と言っているかと思えます。そしてこの人たちは大方はファリサイ派と言われる派に属していたのであります。

「律法学者の言うこと、それはすべて行い、守りなさい。しかし、その行いは見倣ってはならない。彼らは言うだけで実行していない。」このようにイエス様は手厳しく批判されるのであります。律法学者は律法を専門に研究して、これを人々に教える教師であります。そして教師たる者、人格と生活、存在と実践をもって人々を教え、慰め、励まし、人々を信仰に、まことの神に導くことが律法学者に与えられた使命であります。

今日の箇所では、8節から「あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。また、地上の者を『父』と呼んではならない。また、『教師』と呼ばれてもいけない」とこういうふうに使われています。ですからこのように「先生」とか「父」とか「教師」と呼ばれる人々が当時の教会にはいたのであります。従ってこれはイエス様のお言葉であると同時に、少し時代を経た少し組織だった教会の様子を反映しています。先生とか教師とか父と言うのは、私たちは皆、神のもとで平等だということを言いたい面があるわけですがけれども、或いはこの「父」という形で信仰上の尊敬すべき、例えばアブラハムのことを私たちが「信仰の父」と呼んで彼の信仰を評価する。そういう意味では、或いは当時、「父」とか「教師」とか「先生」と言うのと同じような意味で使われていたのかもしれない。例えば「マザー・テレサ」という、これは「母」ですね。修道女たちの全体の指導者という意味で「マザー」と言うのと同じように、「父」という言い方があったのかもしれない。

せん。

そういう指導者のあり方が、今日の 23 章全体で問われているわけであります。6 節を見ますと、「宴会では上座、会堂では上席に座ることを好み、また、広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれたりすることを好む」とあります。しかし、彼らは教え、また先生と呼ばれることを求め、上座に着く。そうでもしなければ機嫌を損ねるといことなのでしょうけれども、それはすべて人に見せるため、見せかけだとイエス様は言われるのです。そして 10 節では、「『教師』と呼ばれてもいけない。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」とこのようにキリストは言われます。

「あなたがたの教師はキリスト一人だけである」とこのように言われて、今日の箇所は 1 節にありますように、「イエスは群衆と弟子たちにお話になった」というので、「イエス」というのがイエス様の固有名なのです。私たちが太郎くんとか清くんというふうな固有名がイエスです。それに対して 10 節にある「キリスト」というのは固有名ではなくて、今日的に言うなら「救い主」という意味合いの称号です。そしてイエス様が救い主であるというそういう意味合いを「イエス・キリスト」と言うわけです。だからイエス・キリストというのはジョン・ケネディと言うのとはちょっと違うのです。名と苗字というのではなくて、固有名とそれがどういう人物かということで、イエスは救い主であるとそういう意味がイエス・キリストですけれども、今日のところを見ますと、「あなたがたの教師はキリスト一人だけである」となっているので、キリストが称号から固有名に変わっているのが窺えます。これはイエス様の所謂十字架までの在世当時とは少し時が経過していることがこの 10 節で窺えるのであります。

いずれにしても、それならばそのキリストというのがやや固有名詞化しているわけですが、そのキリストとはどういう方なのか。勿論 10 節に、「教師はキリスト一人だけだ」とあるので、キリストはただ一人の教師だというわけですが、それに続いて、「あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい」とこういうふうに使われています。「仕える者」というのは、「僕(しもべ)」と言ってもいいのですが、原語では「ディアコノス」と言って「奉仕者」を指します。そしてキリスト教会の歴史の中では「執事」を指す言葉です。そしてこれと類語の「ディアコニア」という言葉があります。これは「奉仕」と訳される言葉です。だから本当に偉い人は、仕える人だ。だからここには、キリストはどのような

のか、或いはそのことも含めてこの全体をキリストの言葉とすれば、キリストは
どういう道を歩むつもりなのか。それはどこまでも仕える道なのだと。人の上に
立ってとやかく言って指導して、権威を求めて、そして上座を求める、そういう
ことではなくて、仕える人がそれは本当に偉い人なのだと。そういう人こそ神に
よって評価されるのだ。こういうふうと言っておられるのです。

別の福音書、ヨハネによる福音書というのがもう少し後ろにありまして、それ
の13章に“弟子の足を洗う”と書かれています。これはどういう場面かと言いま
すと、イエス様と弟子たちが所謂「最後の晩餐」、イエス様が十字架につけられた
のは俗に13日の金曜日と言われるのですが、従って12日の夕食をイエス様が弟
子たちと一緒にされました。その時にイエス様は弟子たちの足を洗われたのです。
人の足を洗うというのは文字通り僕・奴隷の仕事です。先生が一人一人の弟子の
足を洗われたのです。12節から読みますと、「さて、イエスは、弟子たちの足を
洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。『わたしがあなたがたに
したことが分かるか。あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そ
のように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師である
わたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わな
なければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするよう
にと、模範を示したのである。』」

このようにここにもイエス様ご自身、「わたしのことを『先生』と言ったり、『師』
と呼ぶのは正しい」という言葉もありますが、「そのわたしがあなたがたの足を洗
ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。」つまり、「互
いに仕え合いなさい」と言われています。イエス様の弟子でも「どちらが偉いか
論争」というのはずっとやっているのですね。彼らはイエス様が成功してイスラ
エルの指導者になると思っていたのです。ですから、「イエス様がその一番の頂上
に立たれた時は、わたしを右に、わたしを左の座に付けることを約束してくださ
い」と何回も求めているのです。これは彼らが、イエス様がどの道を行こうとさ
れているかということを理解していないということを実に示しているわけです。
「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示し
たのである」と、このようにイエス様はおっしゃっています。

ですからイエス様のことはいろんな言い方ができるのですが、「救い主・キリ
スト」といってもいいわけですし、「イエスは主なり」というのがキリスト教の信
仰です。「主」というのは「神様」のことを指します。ですから今日のマタイによ

る福音書 23 章ではこれを「ディアコノス・キリスト論」と言います。ちょっと難しいですが、どういうことかと言いますと、キリストはどういう方なのかということをはひと言で言うと、「ディアコノス・仕える人」なのだ。それが今日の聖書が言っていることです。ところが特に律法学者たちは仕えるのではなくて、人の上に立って教える。その教えは聖書を持って言うのだから、それは正しい。だから聞いて守りなさい。しかし、彼らのすることに倣ってはならないと手厳しい批判をされたわけであります。

そういうわけでこの 23 章では、特に言葉の上で問われているのは指導者たちであります。しかし今日のお話は、「イエス様は群集と弟子たちにお話しになった」とありますから、広くすべての人に言っておられるわけです。勿論指導者が先ず聞かなければならない。指導者であっても一人の人間であることには変わらないわけであります。ですから今日の箇所はすべての者に当てはまるということになります。

私たちは聖書の今日のようなところを読んでも、聞いても、人の顔がちらちら浮かぶ事があるかもしれません。“そう言えば、あの人も言うことは言うけれど、することはなっていない”と、あの人この人が思い浮かぶかもしれません。しかしこれでは聖書を読んだ事にはならないのです。この 23 章全体を覆っているこの厳しさというのは、私たち各自に向けられている厳しさなのです。人のことをとやかく言うための材料を与えてくれているわけではなくて、私たちが本当に自己吟味をするそのためにこそ語られている言葉であります。

これは折々申しますことですが、キリスト教の歴史があって、大きくはカトリックとプロテスタントに教会が分かれるというのは学校でも習うことです。カトリックのことを「旧教」と言い、プロテスタントのことを「新教」と言います。いわゆる宗教改革によって新しいと言われる教会、プロテスタントが起こったのですが、それは 1517 年のことでした。宗教改革者であるマルチン・ルターという人はカトリックの修道士でした。この人が聖書をずーっと深く読んでいったら、カトリック教会が教えていることと聖書が教えていることとがずれているということに気付いたのです。そして聖書を読めば読むほど、ずれているどころか、教会の教えは間違っている。この教会の教えによっては誰一人救われはしないという、そこまで彼は思い知らされるようになったのです。そのようにして有名な「九十五箇条の提題」という、九十五箇条からなる問題提起をしたのです。これがきっかけになって、プロテスタントと言われる教会が生まれたわけであります。九

十五箇条から成る提題の第一が、「わたしたちの主イエス・キリスト、主であり師であるイエス・キリストは、わたしたち信仰者の全生涯が日々悔い改めであることを求めておられるのである」というのです。どういうことかというと、ルターは、「わたしは間違っていました」ということを彼自身告白しているのです。「悔い改め」というのは、日々自分のそういう足りなさに気がつく。目覚める。そして生活が新しいところに引き入れられていくことなのです。ですから、「悔い改めなさい」というのはわたしは嫌いな言葉でしたが、今ではこの言葉がとても好きになりました。それは、「今まで良しと思っていたことの間違いに気付く」「理解が改まる」ということなのです。気付くことによって、私たちは本当に新しい歩みの中に入って行くのです。

そういう意味で、イエス様はここで思い切って言うべきことを言っておられるわけです。ほどほどのことでは人間は改まらないのですね。自分の非というのが分からないのです。そして自分がいっかどの人間のように、偉い者のように思ってしまう。そういう中でイエス様は、「あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と言われます。

私たちは今日の厳しい言葉を、私に向って、そして私のために、私の生活が本当に新しい、喜ばしい生活へと入っていくためにこそ語っていただいている。それこそ神の律法、私に対する指図なのだと、そのように読まなければいけないと思います。

お祈りいたします。

憐れみに富み給う主イエス・キリストの父なる神様。

あなたは時に私たちを新たな生活へ、境地へと引き入れるために、厳しい言葉を語り、私たちに自己反省を、また悔い改めを求め給います。どうか私たちがそのあなたの御言葉を避けないで、我が事としてそれを受け止めて、御言葉の導きに従うことができるようにさせてください。そしてあなたの御言葉が真実であること、私たちのための御言葉であることを、どうか知ることができるようにさせてください。

この祈り、イエス様の御名をとおし御前におささげいたします。アーメン